

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷十二第

行發日一月一年四十正大

號別特

地租と營業税との對立に關する考察……………法學博士 神戸 正雄

西陣の機業仲間……………經濟學博士 本庄榮治郎

朝鮮の農業金融組織……………法學博士 河田 嗣郎

往古に於ける上海と日本の史的關係……………文學博士 新村 出

資本の社會的性質……………法學博士 河 上 肇

ビオ・ソシヤル假説の意義……………文學博士 米田庄太郎

産業集中に就てのマルクス説の謬想……………法學博士 田 島 錦治

金紙幣本位制……………法學士 作田 莊一

水産資本融通問題……………法學博士 山本美越乃

海運に於ける競争の運賃に及ぼす影響……………法學士 小島昌太郎

支那の帝政と支那の文化……………文學博士 矢野 仁一

倫理と經濟との關係……………法學博士 財部 靜治

往古に於ける上海と日本の史的關係

新 村 出

緒 言

予は大正八年上海に遊び十日程滯留して歸朝した後、同地と日本人との史的關係を回顧して見たくなり、先づ光緒以前の歴史を調査しはじめた。即ち日清通商條約が締結されて上海口等の十四港が日本に向つて開かれた明治四年、即ち同治十年、西紀一八七一年の七月、乃至該條約批准の交換が行はれた翌々明治六年、同治十二年、西紀一八七三年三月より以前の沿革を調べておかうとしたのであつた。爾來五ヶ年資料も至つて乏しく、涉獵する所も多からず、考證を悉くさる點もあるけれども、一通り得た結果を叙述して、以て大方の補正を仰ぎ日支交通史の攷究に資さうと思ふ。

日本と上海との關係は、清朝以前、詳に云はゞ明末清初以前と其以後とで一大時期が畫せられる。徳川時代長崎に於ける唐貿易の約二百年間が重要な一時期である。支那の開國は、日本の開國に先だつこと十餘年又は十數年であると云へるが、清國が鴉片戰爭の結果、南京條約によつ

て上海等の五港を開き、香港を英國に割讓した道光二十二年、西紀一八四二年即ち我が天保十三年より以後の上海、さては日本が開國を實行した安政六年、西紀一八五九年、清朝の咸豐九年より以後の上海、更に進んで徳川幕府の船艦が上海に渡航した文久二年三年、同治元年二年、西紀一八六二年六三年より以後の上海と日本との關係は、歴史的に興味が深く、且つ頗る重要なものがある。然しこれらの年代より以來、日清通商條約に至るまでの約三十年或は凡十年前後の一時期については、後日別に説くこととし、本稿に於ては、徳川時代の支那貿易及びその以前に於ける上海と日本との交渉點を考究しようと思ふのである。

上述の如く時期を限定してかゝると、先づ唐宋元明に亘る一大期間に對して明末清初以降、即ち大まかに云へば清朝の一大期間が存するわけである。後者は徳川時代の唐貿易約二百年間に當るが、前者は上は遣唐使時代より、下は倭寇を経て日明貿易の復興時代に至る約八百有餘年間を包括する。無論この長期間は唐宋時代と元明時代とに分けて考へねばならぬし、遣唐使船の時期と日宋貿易の時期とも趣が違ふが、それよりも元寇を主にした彼れの進取時代と、倭寇を中心にした明の海防時代とは様子が大に異なるのである。但し以上の如き時代の區劃は元より便宜上の沙汰で、其色分けも極粗つばいものであつて、拘泥するには當らぬけれど、假りに姑く右の如き目安をつけておいて叙述を進めることにする。

一 唐宋時代の上海と日本

唐時代の上海邊は港としても都邑としても特に取立て、いふ程の地でなかつたことは申すまでもない。行政區劃としては其邊一帶に蘇州華亭縣に屬してゐた。上海地方の史的地理や河川の流域開塞の變遷等は省略することにすが、その華亭縣といふのは、今の松江府治のある所であるといふ。川の名としての松江は即ち吳淞江、今いはゆる蘇州河スウチーグイリッに當るのであつて、その下流の海に注ぐ處が滬瀆と呼ばれた。今、黃浦ハクプの川口になつてゐる吳淞ウソウといふ地名は、もと吳淞江即ち吳郡の松江といふ川の出口であつたことは、人の知る所である。唐宋時代に於て船舶はこの江を出入してゐた。日本や新羅の船も亦右の華亭縣に當る松江府の邊に來てゐたといふことである。我國の遣唐使船は長江に入つては揚州に着いたが、松江に上つたことが有るか無いか、又その下流なる上海邊に泊したことが有るか無いか、其邊の事は史籍に明記してないから判らぬ。天平六年開元二十二年遣唐使の四船が歸航のをり蘇州より海に入る由が續日本紀に見えてをり、又天平寶字五年、唐の肅宗乾元四年の頃に、特使の一行が歸る時にも蘇州に出で、刺史の盡力によつて其地で船を造つたことも同書に載つてをる。蘇州の治下の何處に於て造船したかは知られない。寶龜年度の遣唐使船の歸る時には、楊子江口を發して蘇州常熟縣に至つて信風を候つたと云ふこと

が、同じく續起に記るしてある。これは代宗の大暦年中のことであるが、華亭とは縣は違ふ。右の様子遣唐使船と松江や華亭とは明瞭に結びつけかねるのである。少くとも國史だけでは、關係がわからぬと云ふの外はない。

宋時代になると、關係が段々判明して來る。宋元時代の上海については、藤田豊八氏の考證が史學雜誌第二十七編大正五年度の十月號に、「宋元時代海港としての杭州、附上海膠州」(第二回)と題する論文に載つてゐる。この側の研究では、今の所最も典據たるものであらうと思はれる。尙東洋學報第七卷第二號大正六年五月分にも同氏の「宋代の市舶司及び市舶條例」と題する論文があり、その一八六頁以下數葉に上海關係のことが見える。宜しく參考すべきである。その他上海縣志卷一疆域沿革、卷十二職官表などの條が要を得てゐるかと思ふ。今それらに由ると、古く吳淞江に注ぐ青龍江といふ川のほとりに青龍鎮といふ鎮があつて、海舶は宋時には吳淞江を遡り青龍江を経て、前に述べた華亭縣の城下に達したが、後には青龍江の流が塞がつて舟が通じ難いので、上海縣治の邊から上陸することとなり、そこで上海といふ名稱も起つたと云ふことである。而して宋代には、上海はやはり華亭縣に屬してゐたが、州の領治では、五代以後蘇州から分れた秀州の支配となつてゐたもので、それが更に浙西路の嘉興府の所屬となつたのであつた。かくて南宋に至るまでは、上海より上流少しく西南に當る青龍鎮が海舶の下錨した處であつたが、南宋

中期よりは、上海が遂に貿易港として發達するに至つた。北宋の頃より既に秀州華亭縣に市舶司が置かれたのが、南宋の紹興年中には市舶務に改まり、乾道年中にはそれが華亭海即ち上海市に置かれるやうになつたらしいと云ふことである。この紹興乾道年間は平安朝末期の院政時代源平時代に當るので、大體西暦の十二世紀の中葉になる。その時分華亭は繁榮し蠻舶も來泊してゐたと云ふから、大食人即ちアラブ人も居つたに違ひない。かくの如くにして元の時代に及び上海鎮に再び市舶司を設け、尋でその跡に上海縣を建置したのであつた。畢竟上海が海舶下掟の地として發達するに至つたのは、南宋以來と云つて差支ない。

日宋貿易の盛んであつた時分、青龍鎮なり上海市なりと日本との關係は分明でない。明州等の方との關係は知れてゐるが、秀州との關係は、纔に我邦の漂流民の事だけほか判つてゐない。唯後世の漂流史に由ると、漂流の陰には貿易といふ事柄が潜んでゐることが多いので、いはゆる漂流は常に必ずしも徹頭徹尾偶然の出來事といふわけではなくて、漂着地附近との間に何等かの交通關係の成立つてゐることを暗示することが多い。殊に近世鎖國の日本と朝鮮支那との間に於て屢々如斯き例を見るのである。近世の例を以て中古を推斷することは出來ぬが、とにかく予輩をして事實が隠れてゐるのではないかと疑はしめるのである。それは宋史卷四百九十一日本傳に見える次の二三例である。いづれも南宋の後期の漂流であるが、第一には淳熙十年、即ち壽永二年に日本人七十三人が漂流して秀州華亭縣に至つたので、常平義倉の錢米を給して之を振恤したと

いふこと、第二には更に十年以後なる紹熙四年即ち建久元年にも日本人が何人か漂泊の結果、泰州と秀州華亭縣とに至つたので、其貨物を取る勿らしめ常平米を出して振給したといふこと、第三には更に七年經て慶元六年即ち正治二年には蘇州の平江府に日本の潜流民が來着したといふこと、以上の三例である。泰州と平江府とは、いづれも長江以内の關係ではあるが、姑く措くとしても、これら源平合戦の時期から鎌倉初期に亘る西紀第十二世紀の末葉に方り日本船が長江の出口附近に漂流したのを、間近の貿易地たる華亭縣まで連れて行かれて救恤された場合が二度あつたと見ゆる。漂民どもは其地から直接日本に還されたか、それとも近世の場合の如く、例へば臨安府即ち杭州を經て明州即ち寧波より便船に托せられて歸されたか、固より明かでない。唯上例に由て日宋貿易が秀州にも及んでゐたのではあるまいかと思はれるのである。ともかく、日本人と上海との交渉の存在だけは、始めてこれを以て明かにすることが出来るわけである。

二 元時代の上海と日本

元になつてから世祖至元十三年に臨安を陥れ江南を略した後、その翌年宋時の舊に由つて上海に市舶司が立てられたが、二十年の後、成宗の大徳二年に至つて慶元市舶提舉司に編入されてしまつた様なことがある。新附の江南を根據として盛に艦船を製造し、江南軍を以て高麗兵と東西呼應して日本を攻撃し大敗したのは、至元十八年、即ち弘安四年、西紀一二八一年のことであつ

たが、この戦役に際して造船術も進歩し船舶運輸の業も發達して、所謂海運が開けて來たのは著名な事實であるが、上海港がこの役によつ空前の進運を見るに至つたことも推知すべきであらう。上海が特に元寇に關して幾何の寄與をなしたかと云ふことは、史に明記してない様であるが、既にジエース氏の史的上海にも一言したやうに、予輩も亦元寇の役の影響は頗る大なるものがあつたこと、考へるのである。縣志に由ると、元寇の翌年なる至元十八年には詔して征東留後軍を以て慶元と上海と涑浦との三ヶ處の海口に分鎮したとあり、同二十二年には下萬戶府二十二翼の一を以て松江に駐め、其鎮處は上海等に在つたと云ふことである。征東留後軍の分鎮した他の二ヶ處のうち、慶元は明州即ち寧波であるが、涑浦は杭州灣に瀕する海港であつて、云はゞ杭州即ち南宋の首都臨安の海口であつたもので、南宋の中期頃には賈舶の來集で相當に繁榮したものでらしいのである。マルコ・ポーロも涑浦の港を特筆して、行在キンサイより東北二十五哩にある非常な良港であると云つて、印度よりの賈舶來集する由を記してある。このガンプ港について略記した此大旅行家は、上海について何等書いてゐない。蘇杭間の名區についての記載は散見してゐるが、上海への來遊はなかつたのみならず、聞知する所もなかつた様に見えるのである。元寇の役を叙して、遠征軍がザイツン(刺桐)及びキンサイ(行在)の諸港より出發したとは書いたが、此章に於ても、港の名を擧げない、無論上海の名を録してゐない。

(附言) 以上元時代に至る上海と日本との歴史的關係を一瞥したのであるが、他日更に稿を改めて明清時代の記述を試みることにする。